N-5　石巻市牡鹿町新山浜地区　　2012 年 2 月 9 日（木）

報告者名　沼田　愛　　被調査者生年　① 1950 年（男）、② 57 才（女）
調査者名　高倉　浩樹　　被調査者属性　① 区長、漁師、② 話者①の妻、主婦
補助調査者　沼田　愛

※本報告は、同日行った調査のうち、人形様行事について特筆したものである。調査地概要等は別頁の報告書に記載されている。

※行事調査中は適宜参加者に聞き書きを行った。いずれも新山浜出身の 40 代から 70 代の男性である。

人形様行事の概要

人形様とは、新山浜から厄を払って集落の外に追い出す厄祓いの行事である。藁で人形様を仕立て、その頭に住民の厄を移した串刺し状の団子を刺して、ムラ境付近の山の中に集落の方向を向けずに置いて来る。人形様や行事に使用する門やヘイソクなどは毎年作りかえられる。

人形様を仕立てる作業には、新山浜の全戸から男性が参加をする。女性は団子を準備するため、人形様をつくる作業には参加しない。また、その年に不幸があった家は参加を遠慮する。団子は家族の人数とカミさまと人形様の最低 3 個を各家庭で用意する。話者家の場合は、夫婦とおばあさん（A 氏の実母か）と 3 人家族なので、最低 5 個を用意すればよいが、外にでているこどもの分も含めて 15 個つくっている。

話者 ① によれば、新山浜の住民の集まる機会のなかで、人形様行事だけは行事に対する住民の積極性を感じることができる。ほかの行事等での集まりでは、〇時集合と言われても、「仙台時間」として集合時間に家をでる。しかし人形様の準備には早めに集合し、かつ参加率も高いという。また、ふだんも共同で出漁することなどがないため、新山浜の住民が集まって行うという点でも、人形様の行事はめずらしいと感じている。

しかし、全戸から必ずひとりが参加しなければならないというわけではない。副区長は副区長に就任したのを機に、自分も関わらなければならないと自覚して参加し始めた、と話者 ① は認識している。

新山浜の人形様行事は、数年前にも多賀城の資料館（東北歴史博物館か？）やテレビ局に取材されている。インタビューなどを求められる際は、なまりの少ない男性に答えてもらっている。テレビ局の撮影の際には、新山浜の集落内を歩くシーンをとるために 3 回往復させられた。また笑いながらやっていたら静かにしてくださいと言われたという。

人形様行事の準備

13 時集合であったが、それより前に生活センター前に男性が集まり始める〔12 時 45 分〕。先に到着した者が話者家に区長を呼びに来て、それに促されて話者 ① が生活センターを解錠し

た。まず話者家の納屋から藁を運び出し、生活センター正面側の道路付近で藁を整える作業に入る。ここから人形様の製作が始まる。参加者たちは作業中も冗談を言い合いながら和気あいあいとしたとても明るい雰囲気であった。

新山浜で稲作をしている家はないため、藁の確保は区長の仕事である。区長に就任した者は、自らの人的ネットワークを駆使して農家に藁を保存しておくように頼む。

ある住民（男性、78 歳）が区長を務めていたときは、藁は無料でもらえるものではないため、酒 2 升を持っていって譲ってもらった。今年使用した藁は、区長が息子の嫁の実家（宮城県大崎市古川）に魚などをもっていってあらかじめ頼んでおき、譲ってもらったものである。しかし、住民は区長がどこからどのように藁を入手してきたのかについては関心を払っていない。

なお、藁は手刈りの藁でなければならないため、ワラを用意するのが大変であるという。機械で刈り入れした藁だと短く切りそろえられているためで、長さが短い藁では人形様のかたちの恰好がつかないからである。

人形様の行事の際には、区長が責任者のような役割になる。そのため、ふだんは年上の住民への言葉づかいを気にするが、人形様のときは年齢に関わらず区長が上になるので、区長が改まった口調で指示しなくても、相手は指示を聞いてくれる。

人形様の製作は、藁を整える、藁から人形様をつくる、人形様を担ぐ木の組をつくる、人形様の腰の部分にさす木刀をつくる、仮門につける縄やヘイソクを用意する（この作業のみ生活センター内で作業）、といった作業を分担することで成立する。これらの作業は住民の集合状況に合わせて、ほぼ同時並行で行われる。

それぞれの作業の現場では、適宜、年長者（70 代後半程度）から若年者（70 代以下）へと指導が行われていた。一方で、同じ作業に数年間取り組んでいくと、個人ごとに、人形様を作るのが得意、縄を綯うのが得意、といったようにそれぞれに得意な作業ができる。これを「縄張り」という。この「縄張り」を他のひとが行おうとすると、「縄張り」を持つひとは不快になるため、作業はその「縄張り」を持つひとに任せるのが暗黙のルールである。ただし口出し（指図）はする。数年間同じ作業に携わった後は、少しずつ次の世代に作業の中心を移すように意識される。ただし、人形様を整形していく過程は熟練の者が担うという暗黙の了解がある。

それぞれの作業を行うメンバーは重複する場合もあり、特に藁を整える・藁から人形様をつくる・人形様を担ぐ木組をつくる、という 3 つの役は人員の移動が頻繁に行われる。

以下、作業過程を報告する。複数の作業が同時並行的に行われているが、人形様の本体を製作する作業が中心である。

作業 1.　藁を整える

人形様の本体の製作は、最初にワラをそいで汚い部分や折れている部分を除去する作業から始まる。これは、刈り取られたままの藁を使用すると、人形様が汚く見えるからである。生活センターの南側の道路の端で、2 名から 6 名程度がこの作業にあたる。

適当な束に分けた藁に、手櫛をかける要領で指を使って、絡まっている細かい藁やごみを払い落していく。整えられた藁は適度な束の状態で括って一時的に保管される。整え終わった藁から適度な分量（束にした時の直径が 50 センチメートル程度）にし、これをまず人形様の腕を除く胴体部分として、人形をつくる人たちに受け渡す。

作業 2.　人形様を担ぐ部分を製作する

作業 1 と同時並行で行われる。人形様を担ぐ木製の部分を、本報告では便宜的に台と呼ぶ（正式名称未調査）。この台に人形様を乗せる。人形様の神輿のような形状になるが肩で担がずに、両腕を下ろした状態で台の両端を 2 人で持つ。台ごと人形様を山に置いて来るため、台も毎年作りかえられる。

台の製作は、長さ約 2 メートルの木材 2 本に対して、長さ約 70 センチメートルの木材 3 本を、梯子を作るように交差させて固定していく作業である。これは男性 2 名（適宜 3 名に増員）が行った。使用する樹種に決まりはない。

製作に際しては、台に人形様を乗せたときに正面にあたる方向を、北側に向けて製作してはならない。報告者には台の状態だけでどちらが前か判断できなかったが、ある年配の住民が製作している現場に到着した際、前を北向きに作っているから台の向きを直すようにと注意している。これに対して製作していた住民は、どちらを前と認識して作業していたかを確認し、指摘が間違っていることを反論した上で作業を継続した。

木材を結びつける方法には適当な結び方（「正しいやり方」）がある。これはかつて人形様を徒歩で山を登って置いて来ていた際に、長時間足場の悪い道を歩くため、人形様を運ぶ際に木材がずれていかないように注意する必要があったからである。作業中に様子を見に来た年配者が以上のように指摘したため、一度結びつけた縄をほどき、もう一度「正しいやり方」に則って、順番に縄をかけなおした。

作業 3.　門・ヘイソク・刀の製作

作業 4 と同時並行で行われる。門は、人形様が集落内を巡行する際にくぐるもので、青竹 2 本の間に、ヘイソクを 3 か所に挟んだ注連縄を渡して結びつけたものを 3 組つくる。この注連縄は、正月の注連縄と違って左向きに綯うため、綯えるひとが 2 人ほどしかいない。ある話者によれば、これは仮の鳥居に見立てたもので、3 組つくるのは三門の鳥居だからであるという。縄綯いは生活センター屋内の入り口付近で 1 名が担当していた。

人形様の腰に付ける木刀をつくる。木刀にする樹種に決まりはない。1 名が生活センター前のスペースで黙々と製作する。製作していたひとが完成と判断し作業を中止したが、年配者から刀に背がないと言われ、修正を加える。鞘の部分には十字の文様が入っていた。

作業 4.　人形様の本体を作る

作業 1 および作業 2 と同時並行で行われる。整え終えた藁が人形様の胴体の太さに相当すると、本体を作る作業が始められる〔13 時 27 分〕。これは生活センターの入り口前のようなスペースで行われる。生活センター南側の道路端では、人形様の腕の部分に使用するための藁を整える作業が続けられる。

稲の根元部分が人形様の頭になるので、地面に藁束の根元を打ちつけ、頭が平坦になるように揃える。根元付近 2 ヵ所を紐で結び、束の状態で固定する。むかしはすべてワラの縄で結んでいたが、現在はアミヒモを再利用するかたちで利用する。ただし最終的に仕上げるときには、そのアミヒモの上からワラ縄をかぶせるようにむすんでアミヒモを隠す。紐はきつく結び、後に腕を挟みこんで固定できるようする。この過程で年配者が「人形様が汚い」と言いながら、細かい藁屑を取り除いて行く。紐の結び目がある方を人形様の背中側とする。

次に人形様の胴体を、木槌（正式名称未調査）を用いて腹側と背中側でふたつに割る「また割り」をする。「きれいに割れ」と年配者から声がかかる〔13 時 35 分〕。腕を挟みこむには、胴体部分が十分な堅さになかったため一度「また割り」をやめ、腕を固定しやすいように、新たにもう 1 ヵ所紐で結ぶ（先に結んだ 2 ヵ所の間のあたり）。再び「また割り」をして腕を挟みこむと、「また割り」していた部分をもとに戻す。

この段階になると、他の作業を終えたひとたちが、人形様作りをしているひとたちの周りに集まりだす。人形様を作る作業自体は、4、5 名が行う。

人形様の腕と手を作る。まだ人形様の頭が下を向いている状態で作業をする。腕の部分にあたる藁束を 3 つにわけて、手の部分を残し三つ編みにしていく。手首にあたる部分を藁で結んで三つ編みを固定し、手にあたる部分を 5 つに分けて指を作る。

A 氏や参加者たちによれば、指を作る作業が人形様作りで一番難しい。頭が下向きになっていること、人形様の顔をつける正面がどちらであるのかを留意しながら、指のかたちを整える。特に親指の位置に気をつけると同時に、左右の手の指の太さが同じ程度になるように意識をはらう。これは作業に直接関わっているひとだけではなく、それを見ているひとからも声を掛け合って調節していく。腕と指が作り終わると、カッターで手のひらのかたちを整える。指を作るのは難しいし、寒くて手袋をしたいだろうから、指のかたちにはこだわらずに作って、手袋をかぶせたらどうかという会話も交わされた（ただし実現させようという意志はあまり感じられなかった。）

人形様を台に固定する作業に移行する〔14 時 00 分〕。この作業の時点で、作業 4 はほぼ終了し、男性 17 名ほどが人形様の周りを囲んでいる。また、各家から団子が持ち寄られ、生活センターの軒下の台の上に乗せられていく。「○○から頼まれた」と言って、2 家族分の団子を持ってきた住民もいた。団子を持ってくるのは女性で、人形をつくっている自分の夫（子ども）に頭のあたりに串団子をもっていき、頭のまわりでまわすひともいる。これで厄が団子に移るといわれている。団子を置いてすぐに帰る人もいれば、男性やほかの家の女性と会話をしてから帰ったり、そのまま人形様つくりを見ている女性もいた。ただし、男性の輪に入って見学するのではなく、少し距離を置いたところから見学している。

まず足を作るために「また割り」をする。これは人形様の正面から見て左右に藁を分ける作業である。「また割り」をして人形様のかたちが完成すると、人形様を起こして台の上に乗せる。人形様は頭付近から台の木材に向かて 4 ヵ所に紐を渡して固定する。このとき、3 本並んだ短い木材のうち、真ん中の木材の上に人形様の足を乗せ、紐で足と木材を結ぶ。しかし、人形様の正面（紐の結び目がない方）と台の正面（生活センターからみて道路側）の向きが合わなかったので、紐をはずして人形様を回転させ、正面の向きを揃えて、再び固定する。カッターやハサミを使い、足や胴体の不揃いな長さの藁を切り揃えていく。

人形様に白地の紙に黒地で目や口を書いた「顔」をあてる。「顔」の紙の大きさは A4 用紙程度であった。「顔」の上下を、青竹を割って作ったヒゴのようなもの（正式名称未調査）で固定する。この「顔」は、数年前に手書きで製作されたもののコピーである（区長が書いた）。「顔」の上を固定したら、下を固定する前に木刀をさす。このときに刀の背の向きを間違えたため差し直す。刀の向きを注意した男性が、「来年から人形様作りに来なくていいかと思ったが、刀の差し方が分からないなら来年も自分が来ないといけないな」と笑ったが、誰かがそれに答えること

はなく、男性もそれを気にしていなかった。「顔」を固定し終えると、頭の部分にヘイソク 1 本、杉の葉、竹、各家から持ち寄られた団子を刺していく〔14 時 15 分〕。これで完成となる。

団子はダンゴ粉（白玉粉か？）でつくり、中に餡は入れず、生地に味付けもしない。団子はその家の家族の人数分に、カミサマと人形様の分の合計 2 個を足した数を用意する。ただし、団子の数や、ひと串にいくつの団子を刺すかはその家で自由に判断できる。4 個など数の悪い数字になった場合は、ひとつ足して 5 個にする。

今年は全ての家が人形様の完成に団子の用意が間にあったが、これまでは生地に十分に火が通っていないうちに団子にして、慌てて持ってくる場合もあった。これは午前中に漁に出ているため、団子の用意を始めるのが遅くなるからである。しかし今年は震災で漁に出ていないことに加えて、人形様を完成させるのが昨年までより 30 分ほど時間がかかったため、余裕をもって団子を作ることができた。また、団子の大きさは、他の家よりも大きくしようという意地を出しあった結果、現在の大きさになった。話者①や話者②が記憶している以前の団子は、現在の半分ほどの大きさだった。

人形様行事

完成した人形様の前に男性が集まる。御神酒と、人形様に差した団子を一人 1 つ取って食べた。御神酒と団子は、その場にいた女性や調査者にも配られた。団子を食べ終わった男性から、門を持ったり太鼓を用意したりし始める。誰が何をするのかを区長や年配者が指示する様子はみられなかった。

太鼓、獅子頭、御神酒を持ったひとと、門を持った 3 組が、人形様より先に出発する〔14 時 23 分〕。獅子頭と太鼓は人形様を境におくときに厄払いなので使うと説明されたが、獅子頭をかぶる所作などは見受けられなかった。

太鼓は出発のときに数発鳴らされる。門は生活センター前、浜にある小祠に続く道の入り口、八鳴神社の鳥居と下の 3 ヵ所に配置され、それぞれの近くの地面にヘイソクが 1 本ずつ差される。門などが出発したとき、まだ人形様が出発する用意が整っていなかったので、残っていた男性たちから気が早いと小言が出る。

男性 2 人がもった人形様が生活センターを出発する〔14 時 25 分〕。人形様の周りに男性数名がつくが、支える様子ではない。1 つめの門をくぐる際、門の青竹を持っていた男性がタバコを吸っていたので、人形様を担いでいた男性が「遊びではない」と注意する。人形様が通り終わった門は、青竹を揃えるようにして道路わきに置いておく。

人形様が巡行しているのを家の前で呼びとめ、賽銭を人形様の頭に差して拝むひともいる。しかし、大多数の住民は、神社の前で人形様を待つ。

人形様は浜まで下っていき、浜の端にある小祠に続く道の前で 2 つめの門をくぐり、小祠まで行ってから同じ道を戻ってもう一度門をくぐり、神社に向かう。神社の鳥居の下で 3 つめの門をくぐると、人形様の正面を集落側に向け、地面の上に安置する。つまり、神社の宮（拝殿か？）と鳥居の間に人形様が置かれている状態になる。

集まった住民が人形様に参拝をする。神社には住民が集まっているが、家ごとに、赤飯を盛った小皿（2 皿もしくは 3 皿）、おかず（刺身など）、御神酒（多くの場合盃のみ、徳利と盃の者も

いた）を載せた盆を用意している場合がある。小皿の枚数は 3 皿が正しいが、世代交代の際に受け継がれない場合があり、各家によって異なる。話者家では 3 皿供えている。盆を持った人は、脱帽して門をくぐり、盆を人形様の前に置いて賽銭を人形様の頭に差しこみ、手を合わせる。盆を持って門の外にでる。盆に盛りつけたものは、のちに各家で消費される。

この盆はフナガミサマ（船神様）に供えるものなので、船を持っている家が盆を持って参拝に来る。今年は震災で船が破損しているため、多くの家では供え物を出さない（出せない ?）。しかし、10 軒ほどが供え物を用意していたことが認められた。これは話者 ② によれば、長年の慣習なのでやらないと落ち着かないからではないかという。また、鳥居の外から柏手を打ち、参拝をする住民の姿もあった。

住民の参拝が終了すると、人形様・太鼓・獅子頭を軽トラックの荷台に乗せ、男性 4 名（運転手を含む）で山へ運ぶ。以前は小祠の横から崖を登り、山道をひとが人形様を担いでムラ境まで置きに行った。この山道は狭い道であったが、山の中にある畑や田、養蚕のための桑の手入れなどをする人が使用していたため、踏み固められていた。しかし現在は使われていないため、地面が柔らかくなっているので歩く際に危険である。そのため、現在はトラックで別の道を通る。

B 氏（新山浜出身、所見 60 代）らが中心になって、現在の位置に人形様を置いて来るようになったのは、6 年ほど前からである。したがって、去年までの人形様の痕跡（腐りかけた藁や台）が残っている。現在 80 代くらいの住民のころは、より海岸に近く、泊浜との境目まで運んでいた。人形様を置く場所に到着すると、カミサマの分として 3 本分の団子は残して、残りの団子は集落に持ち帰って住民でわけて食べる。

軽トラックが出発すると、人形様行事が終了した雰囲気になり適宜解散となる。区長ほか数名が、生活センターで御神酒のコップや机などを片付け、それが済むと自由解散し、区長も自宅に戻る。以前は区長やその妻が片付けをしていたが、2、3 年ほど前からは自主的に手伝ってくれるひとが出てきたという。